まなびや

八十数年振りに、二宮像が里帰り

教育博物館のシンボル的展示物

二宮金次郎（尊徳）像

旧・春江南尋常小学校跡地（「江留上文教発祥之地」）でもある現在地に、昭和１０年設置。

教育博物館のシンボル的展示物として、表情や服装の違う二宮像が訪れる人たちを出迎えています。この度、あらたに一体里帰りして戻ってきました。昭和十年に現在地に開校された春江南尋常小学校開校（→春江中学校→春江工業高校→教育博物館）と、二宮尊徳没八十年を記念した像です。博物館玄関の二体と合わせて三体になりました。

玄関入口の像は、敦賀市常宮小学校（平成二七年休校）と福井市一光小中学校（平成四年休校）に設置されていた、二宮金次郎（尊徳）像です。

「大勢の人に見てもらい、学校の名を残したい」と両校地元の了解を得て、教育博物館開館に併せて移設されました。常宮小の像は昭和十五年の陶器製で、御影石の台座には「至誠」と書かれています。

【里帰りした二宮像】
（昭和１０年１０月設置）
旧・春江南尋常小学校

一光小中の像は、昭和三十九年御影石製。台座は石組みで、上一光町の金鉱山の石、下一光町の岩、五太子町の亀甲石が使われています。

「金次郎」は、江戸後期の農政家、二宮尊徳（一七八七～一八五六）の通り名。薪を背に歩きながら書物を読む立像が、「勤勉」「努力」の象徴として、昭和の初め頃から戦前にかけ全国の小学校に像が建てられ、子どものお手本とされていました。尊徳は、幼少時に父母と死別、兄弟離散。親戚に身を寄せ、農作業を手伝いながら勉学に励み、20歳で実家に戻り、田畑を買い戻すなどして、数年後生家の再興を果たします。尊徳の考えは、農作や商いの実践と学問から得た独創的なもので、その手腕が買われて役人となり、窮乏した６００か所もの農村を復興に導きました。

最近は、業績に光があたり、文部科学省が全国に配布している小学校低学年用の道徳用教材にも二宮金次郎が登場しています。【裏面資料参照】

旧・常宮小S15（敦賀市）

旧・一光小中S39（福井市）

懐かしい教材 雑誌・学用品

教育博物館の展示室・廊下には、各時代の教科書だけでなく、懐かしい昭和時代の、学習雑誌・付録、絵本なども手にとって見ることが出来ます。どうぞ、お越しください。

昭和13～14年の絵本（二宮金次郎ほか）

昭和３０年代の学習雑誌・付録

わたしたちの道徳（小学校１・２年）文部科学省発行

家の再建を目指して、土手になたねの栽培など、小さな努力を積み重ねていった二宮金次郎の話

まなびや

小さな　どりょくの　つみかさね―二宮　金次郎―

二宮　金次郎は、まずしい　農家に　生まれました。
小さい　ころから、家の　しごとを　よく　てつだいました。
金次郎が、十四さいの　ときに　お父さんが　なくなり、十六さいの　ときに、お母さんが　なくなりました。兄弟とは　なればなれに　なり、家も　なくした　金次郎は、まんべえおじさんの　お世話に　なる　ことに　なりました。
金次郎は、おじさんの　言いつけを　まもって、一日中　しっかりと　はたらきました。
金次郎には、ゆめが　ありました。

自分で　やる　ことは　しっかりと

（何とか　して、自分が　生まれた　家を　つくり直したい。）
そこで、金次郎は、
（一生けんめいに　勉強して、早く　一人前に　なるぞ。）
と、心に　きめました。
金次郎は、一日の　しごとを　おえると、ねむい　目を　こすりながら、夜おそくまで、本を　読むのでした。
すると、まんべえおじさんは、
「明かりに　つかう　あぶらが　もったいない。早く　ねなさい。」
と　言って、金次郎を　しかりました。

金次郎は、もう　勉強を　やめようかと、考えました。しかし、どう　しても、あきらめる　ことが　できません。
そこで、知り合いの　人から　少しの　*なたねを　もらって、土手に　まき、世話を　しました。
つぎの　年の　春、金次郎が　まいた　なたねは、黄色い　花を、土手　いっぱいに　さかせたのです。
そこからは、まいた　なたねの　何倍もの　なたねを　とる　ことが　できました。
そして、なたねを　あぶらに　とりかえて　もらい、また　勉強する　ことが　できるように　なりました。

自分で　やる　ことは　しっかりと

やがて、金次郎は　りっぱに　せい長し、二十さいの　ときに、自分の　家を　つくり直す　ことが　できたのです。
大人に　なった　金次郎は、「尊徳」と　いう　名前に　かえました。そして、自分が　学んだ、（小さな　どりょくの　つみかさねが、大きな　ことに　つながる。）と　いう　ことを、多くの　人たちに　つたえました。

＊なたね……なの花の　たね。